

● 弔詩 安仁に捧げる 九八・四・三〇

眼を閉じると安仁の貌（かお）が見える  
眼を開けると安仁の姿が見える  
いつまでも どこまでも  
安仁は僕を離れない

僕は眼を閉じて想い起こす  
僕らが生きてきた長い年月を  
光と影に満ち満ちた

三分の二世紀を  
とりわけて今 僕は想い出す  
共に駆け抜けてきた

戦後五十年の疾風怒涛の日々を  
激しく論じ合った革命への夢  
命がけで闘い ふかく傷ついた日々  
共に慰めあつた失意と絶望の日々

共に誓い合つた構造改革政権樹立への決意  
そしてまた想い出す  
僕らが離れ難い友となつた  
あの日のことを

僕らは意見の違いから  
しばしば袂を分かつたが  
神奈川に長洲県政を樹立した時から  
もう二度とケンカ別れはしまいと  
誓い合つた

それは小田急線小駅の  
シヨンベン臭いホームの

ペンキの剥げ落ちたベンチの上だった  
僕らを冷たい夜霧が包んでいた

あれからでも　もう二十三年

こんなに長く　こんなに親密だった友は  
安仁以外にない

ケンカツ早く　人見知りの激しい安仁と

ケンカは遅いが　人見知りでは人後に落ちない僕が

こんなに長く交友できたのは何故か

おそらく共に　メシよりも何よりも

革命とか変革というものが

好きだったからだろう

いかめしいもの　勿体ぶったもの

官僚的なもの　抑圧的なもの

総じて権力的なものへの体質的反発という点で

共通のものがあつたからだろう

だが　安仁の「談には

とても太刀打ちできなかった

「談のボキャブラリーの極端に貧しい僕は

いつも守勢に立たされながら

必死に想像力をかきたてていた

僕がうかぬ顔をしていると

「クボちゃんはカマトトか」

と言ってカラカラと笑った

だが安仁よ　想い起こしてくれ

小田急線小駅の

冷たい夜霧に誓った通り

人口八百三十万の神奈川県に

GDP二千億ドル 韓国 オーストラリア並みのGDPを持つ神奈川県に

構造改革政権を樹立し

二十年間持続したことは

紛れもない事実なのだ

地方 地域が新しい意味を持ち始めた時代に

その先駆けとなった

日本で最も高い知的道徳的ヘゲモニーを持った政治権力が

神奈川県で二十年間続いたという事実は

僕らの人生で重い意味を持つ

構造改革政権の樹立という夢は

首都圏のど真ん中で実現したので 安仁よ

小田急線小駅の夜霧への誓いを

僕らは果たしたのだ

僕はこの点でも安仁に感謝する

安仁との出会いがなければ

長洲さんとの出会いはなく

長洲さんとの出会いがなければ

神奈川県政への参画もなかった

そして 僕らの人生は

もっと単調なものに終わっていただろう

僕らの交友も遥かに散文的なものだったろう

今日 僕は渋谷のコックドールで

一人で昼飯を食べた

ここは 安仁と僕が何十回となく

夕食を食べたところだ

五階の三省堂で待ち合わせ

四階のコックドールで

三千円のディナーをとるのが

いつものコースだった

小さな卓上ランプに照らされながら

ビールとワインで程よく酩酊しながら

僕らはしばし至福の時を持った

だが 三省堂でいくら待っても

安仁はもう二度と現れない

コックドールの卓上ランプが

いかにゆらめいても

安仁がトイレから戻ってくることはない

何という 寂しさ

何という 空しさか

僕はもう 二度と

コックドールには行かない